

# 『怪しい来客簿』の成立過程

——色川武大をめぐる「最後の無頼派」の源流——

木下 弦

本稿では、『怪しい来客簿』（話の特集、一九七七年四月）の成立過程についての考察を通じて、作者色川武大の作家的出発の一端を解明しようとするものである。

色川武大（一九二九年～八九年）は、本名の「色川武大」名義のほか、「阿佐田哲也」や「井上志摩夫」といった複数の筆名を使い分け、筆名によって作風を変えた作家として知られている。『色川武大 阿佐田哲也全集』（全一六巻、福武書店、一九九一年一月～九三年二月）と『井上志摩夫傑作時代小説集』（全五巻、双葉社、一九九七年一月～九八年七月）で、それぞれの営為を概観できるのだが、近年も単行本未収録作品集の刊行が続いているため<sup>①</sup>、その全体像の把握は容易ではなくなっている。また、文壇登場前後に用いられた「井上志摩夫」名義も、いわゆる麻雀小説に用いられた「阿佐田哲也」名義も、今日では色川の多彩な創作活動を印象づけるものだと見えるが、作品発表当時は「色川武大」という人物の情報を伏せた「変名」であったことも、それらの作品をめぐる作者

と読者との関係を考察するうえで無視できない要素であろう。

『昭和文学全集』（第三二巻、小学館、一九八八年十二月）の川村二郎「色川武大・人と作品」によれば、作家的特徴を「いわゆる純文学の領分で書く時には色川武大、エンターテインメントの側で執筆する時には阿佐田哲也、と使い分けられているようである」とまとめたうえで、その作品について「内容的にいえば、どれも私小説に分類されておかしくはない物語である。初めの七編は創作集『怪しい来客簿』から取られている。一読してすぐ知られる筈だが、いずれも作者自身の青春回想の色合を濃く帯びている。」と解説している。

『昭和文学全集』の収録作が「色川武大」名義のみであることに鑑みても、色川のテキストは「読者が当のテキストの作中人物と語り手と作者の同一性を期待し信じていることが、そのテキストを究極的に私小説にする」とされる「私小説の読みのモード」（鈴木登美<sup>③</sup>）の生じやすい性質だといえるだろう。現在、色川は私小説作家に位

置づけられており、私小説研究会編『私小説ハンドブック』（秋山駿・勝又浩監修、勉誠出版、二〇一四年三月、六二頁）において藤

田知浩が「短編小説の連作であるが、スタイルはエッセイに近い。

色川の交友は幅広く、友人や芸人、家族などを題材とした回想記のような趣がある。」と「怪しい来客簿」を評したように、従来の作品評価は作者色川武大の要素を含めるのが定石だったからでもある。

とはいえ、私小説作家という評価は「色川武大」名義を中心化した際に生じるものだと見える。先述の創作活動を考慮すれば、私小説作家としての側面だけで把握できないのはもちろんのこと、その現存が没後に一般的になった「井上志摩夫」名義作品については、そもそも生前は作家論の対象になり得なかった。そのため、資料の整備が進んできたいま、作家論の更新の余地は十分にあるだろう。そもそも、その創作活動に未知の部分が多かったために、私小説論の枠組み以外に展開されにくかったのが従来の色川武大研究の状況だと考えられる。<sup>(4)</sup> それでは、これまで「私小説」とみなされてきた作品群から、どのような新しい視点が見出せるだろうか。

たとえば、色川は追悼記事「二つの貌を持つ最後の無頼派 色川武大・阿佐田哲也の幸福な死」（『週刊文春』第三一巻第一七号、一九八九年四月二〇日）で「最後の無頼派」と称されている。「最後の無頼派」という呼称は色川孝子（「インタヴュー」）「虚」と「実」のバランス——「最後の無頼派」と呼ばれた夫との二十年」（『文學界』第五一卷第五号、一九九七年五月）でも用いられ、その生涯が

「無頼」という概念で包括され得る作家とみなされていることがうかがえる。

しかし、「無頼派」という用語については、議論の当初から「各人各説」<sup>(5)</sup>（奥野健男）とされ、青山光二『純血無頼派の生きた時代——織田作之助・太宰治を中心に』（双葉社、二〇〇一年九月）のように「無頼派」の範囲を限定しようとする立場もあるのだが、坂口安吾や太宰治など、戦後に活躍した、いわゆる「無頼派」作家と色川の直接的な交流は確認されていない。「怪しい来客簿」発表時、「色川武大」がどのような人物と認識され、どのような作家像を標榜していたかについて、色川の知人の回想によって断片的に知ることができるものの、『話の特集』という雑誌メディアを通じた一般読者の視点では、これまで具体的に論じられていなかった。

そこで本稿では、第一創作集『怪しい来客簿』刊行までの期間を初期と仮定したい。「色川武大 阿佐田哲也全集1」には「色川武大」名義の七つの短編が「初期作品」として収録されており、<sup>(6)</sup> さらには全て『怪しい来客簿』以前の発表作である。後述するように、この時期の色川は「阿佐田哲也」名義で単著のみならず自選集を有しているため、色川の発言と、その実態とは合致しない。「色川武大」名義に即した作品史は有効ではないのだが、色川の発言を批判的に参照することで、「阿佐田哲也」や「井上志摩夫」の活躍を内在させながら、第六回中央公論新人賞受賞（当選作「黒い布」）『中央公論』八八八号、一九六一年一月）を通過点に、あたかも寡作の作家の

ように自己演出した意図を明らかにすることが目的である。

「私小説」としてみなされる「怪しい来客簿」において、作者「色川武大」における「無頼」の作家像は、どのように作用しているのだろうか。

## 一 論点の整理

連作小説『怪しい来客簿』（原題同じ）は『話の特集』（全一八回、一〇八号、一九七五年一月〜一二八号、七六年九月）に連載後、単行本化で追加された「後記」で「私のはじめての創作集」と、作者の第一創作集に位置づけられた。第七七回直木賞候補作、第五回泉鏡花文学賞受賞作といった文壇的評価を獲得、単著としては最初の文庫化作品（角川書店、一九七九年四月）である。そのような記念碑的作品であるが、『話の特集』連載中、作者の入院によって連載終了しており、初出誌と初刊本とで本文の大幅な異同が生じている。

同時代評で特筆すべきものとして、種村季弘「畸人ざらい 色川武大『怪しい来客簿』」（『書物漫遊記』筑摩書房、一九七九年一月）は、「大物は一人もいない」という登場人物に注目した評で、角川文庫版『怪しい来客簿』の「解説」（長部日出雄）では、「吉行淳之介・野坂昭如・筒井康隆に続くもう一人の・そしてまったく独自のシニールレアリスト、迷宮世界の道先案内人」と評し、作者を「シニールレアリスト」に位置づけようとしているのだが、直木賞

の選評において、早くから「怪しい来客簿」は私小説化していたと考えられる。

選評は否定的な評が多く、「達意の文章で、身辺雑記ふうでありながら脚色も入って面白い読みものになっている。だが、あまりに断片挿話の寄せあつめ式で、連作とみるには一貫性がない。」（松本清張「井口氏に期待する」といったほか、「いささか玉石混淆の感がないでもなかった」（源氏鶏太「青山氏と色川氏」という欠点の指摘がみられ、「随筆集だと思ふし銚衡に入る前、候補から外すべきたと言ったが、これを買う委員も多く、そのまま候補になった。あとで読み返してみても、わたしはこれを小説とは思えなかった。」（村上三三「気が重い」という選評もあるように、そもそも「小説」として読まれていなかった例もある。

直木賞選評では「私小説」という用語こそ出ていないが、「身辺雑記ふう」や「随筆集だと思ふ」という指摘には「私小説の読みのモード」が見出せる。「一貫性がない」や「玉石混淆」といった評についても、未完のテキストを単行本にまとめたということだけでなく、テキストに内在する要因を探っていく必要があるだろう。なぜなら、色川武大編「色川武大年譜」（『昭和文学全集』によれば、「怪しい来客簿」の執筆動機として、当時、持病がナルコレプシーと判明したことで、「ぼつりぼつり本名を使う仕事のことを考える」ようになり、「二回十七枚の週刊誌連載か二十枚くらいの短編が緊張持続の限度だった。」（——昭和四十九年（一九七四） 四十五

歳」という体調で執筆していたとされるので、色川は書物の体裁よりも「本名を使う仕事」としての「怪しい来客簿」に、何らかの意義を認めていたと考えられるからである。

あらためて確認すれば、『週刊大衆』一九六八年一〇月三日号に登場した麻雀小説作家「阿佐田哲也」の正体が小説家「色川武大」であることが活字上で公表されたのは『週刊読売』一九七〇年一月二七日号の「吉行淳之介の「面白半分」対談」が最初とされる。<sup>(8)</sup>

この対談において色川は「阿佐田哲也」名義で臨んでおり、「阿佐田哲也」が色川の筆名の一つという認識は、常識だったとはいえない。筆名の多い作家、私小説作家、さらには「最後の無頼派」と称される作家像は作者に対する興味を促すものになるが、それらは色川の言語表現に基づいて事後的に形成されたもので、同時代の様相を明らかにするものではない。

色川のテキストはジャンルを問わず過去の創作活動について言及することがしばしばあり、自作自注の機能を果たしている。『小説阿佐田哲也』（角川書店、一九七九年一月）では、「奴」<sup>(9)</sup>（阿佐田哲也）の「過去」について「わりに伝播してかなり広範囲でささやかれるようになった。だが出所はほぼ一か所だ。奴がそう書いただけなのだ。しかも、娯楽小説という形で。」（第一章 虚にして実、バランスが命綱）とある。題名に「小説」とあるので、これを事実とみなすわけにいかないが、事実確認が行われなまま、あらゆるテキストが渾然一体となって色川の伝記的事項を構成している実

状を示している。

しかし、副題の「虚にして実」が示すように色川の「小説」（虚構）が事実であるとすれば、非合法的な事象をも対象とする「無頼」にあって、虚構を事実として扱うわけにはいかないという常識は、極めて有効に働くであろう。色川が「無頼」の生涯を送ったことと、「無頼」の小説家であったこととは区別されなければならないが、前段階として、麻雀小説作家「阿佐田哲也」との同一視が、いつ行われたのかについても確認する必要がある。色川が「無頼」とみなされるには、中央公論新人賞受賞作家としてではなく、麻雀打ち（ギャンブラー）としての作者がテキストに読み込まれなければ成立しないからである。

「怪しい来客簿」の第一の論点は、初出誌から初刊本にかけての本文の異同にみる他作品との関連性があげられる。第二の論点は、作者の実生活が実際には知られていないにもかかわらず、私小説のように読まれてきたことである。第三の論点は、それらが暗示的に書かれている作品『怪しい来客簿』が第一創作集に位置づけられたことそのものを問題化したとき、従来の評価がどのように更新されるかであり、色川における「無頼」の意義が導きだされる。

論証方法としては、初出誌と初刊本で作品配列が異なることから過去作品の暗示を確認し、それらの比較を行う。議論の前提として「色川武大」名義の『生家へ』（中央公論社、一九七九年七月）の「あとがき」を参照し、これまでの作品史が、『生家へ』の「あとがき」

を踏襲してきたことの問題点を掲出する。次に、「怪しい来客簿」と「穴」〔層〕創刊号、一九六五年十一月）で、語り手がガリ版同人雑誌の露見により「無期停学」処分になるという設定は共通しているが、類似表現のある最初期小説「夜風の纏れ」〔運河〕第一号、一九五五年九月）をとりあげたとき、それらが一切語られていないことの意味を考察する。

これらを踏まえ、従来の評価との差異を結論づけたい。

## 二 作品史上の問題点

村松友視（「解題」『色川武大 阿佐田哲也全集1』三八三―三八九頁）は中央公論新人賞受賞前後の色川について、新人賞受賞という「エポック」からの「スランプ」、そして「怪しい来客簿」での「復活」という見取り図を説いた。年譜を参考に、当時の編集者の立場から述べたものだが、「怪しい来客簿」の文章を「正座していた者がぞんざいに見事な胡坐をかいたような、不気味なほどの迫力」と評し、初期の色川が「怪しい来客簿」によって転身を遂げたことの意味を明解な要約となっている。

坪内祐三は『井上志摩夫傑作時代小説集』の書評で、「色川武大年譜」の中央公論新人賞受賞前後の空白期間を問題視している。<sup>10</sup>後に「幻の処女作」に位置づけられる「小さな部屋」（第三次『文学生活』第二号、一九五六年九月）を発掘、「吾輩は猫でない」（『怪

しい来客簿』）と「作品7」（『生家へ』）に発展するテーマの系譜を指摘した。<sup>11</sup>

村松友視と坪内祐三の指摘は、一冊の本として出版された『怪しい来客簿』や『生家へ』までの前史的位置に、短編小説として発表された「初期作品」があるという視点で同様のものであり、『生家へ』を作品史上の到達点とするのは、色川の初期を考察するうえで定石となっているが、既に色川が「あとがき」（『生家へ』）で示していることでもあるため、再検討の余地がある。<sup>12</sup>

色川が『生家へ』までに出版した単著は次の通りである（副題略。共著や再版、文庫版を除く）。

- ・『麻雀の推理』双葉社、一九六九年二月
- ・『麻雀放浪記 青春編』双葉社、一九六九年九月
- ・『牌の魔術師』報知新聞社、一九六九年二月
- ・『麻雀放浪記 風雲編』双葉社、一九七〇年九月
- ・『天和無宿』報知新聞社、一九七〇年十二月
- ・『雀鬼五十番勝負』双葉社、一九七一年四月
- ・『絵本・マジジャンABC』実業之日本社、一九七一年九月
- ・『麻雀放浪記 激闘編』双葉社、一九七一年九月
- ・『麻雀師渡世』日本文芸社、一九七一年九月
- ・『阿佐田哲也のマジジャン秘密教室』青春出版社、一九七一年一月
- ・『厩舎情報』日本文芸社、一九七二年七月

- ・『麻雀放浪記 番外編』双葉社、一九七二年九月
  - ・『ああ!! 勝負師』日本文芸社、一九七三年一月
  - ・『ギャンブル党狼派』双葉社、一九七三年一〇月
  - ・『ギャンブル人生論』けいせい、一九七三年一二月
  - ・『小説・麻雀新選組』双葉社、一九七四年二月
  - ・『阿佐田哲也麻雀小説自選集』双葉社、一九七五年三月
  - ・『清水港のギャンブラー』双葉社、一九七五年五月
  - ・『怪しい来客簿』話の特集、一九七七年四月
  - ・『麻雀狂時代』双葉社、一九七八年六月
  - ・『東一局五十二本場』河出書房新社、一九七八年九月
  - ・『離婚』文藝春秋、一九七八年十一月
  - ・『ぼうふら漂遊記』新潮社、一九七九年三月
  - ・『生家へ』中央公論社、一九七九年七月
- 傍線を付したものが「色川武大」名義での刊行物で、それ以外は全て「阿佐田哲也」名義である。「井上志摩夫」名義の時代小説を除外すれば、いわゆる初期の色川は、ほとんど麻雀小説作家としての創作活動が中心となっている。これらを踏まえれば、色川による作品史が極めて作務的であることが明確になるだろう。
- 『生家へ』には「黒い布」が併録されている。「作品II」は、短編小説「水」(『小説中央公論』第六号、一九六二年一月)の失敗談として読むことができ、作中の語り手「私」と作者を同一視しながら付録の「黒い布」に到着する構成になっている。巻末の「あとがき」

では『生家へ』が「黒い布」の延長線上にあると示されており、記述に即して「習作のつもりで肩に力をいれずに書いた作品集が一つできた」というのが「怪しい来客簿」のことだとすれば、「この二十年の間に、黒い布、怪しい来客簿、生家へ、自分の作品をやっと三つ書くことができた」とは、商業的価値や文壇的評価と無関係の「自分の作品」こそ、「あとがき」に掲げた三作だということを強調する誇張表現と解するべきであろう。ここに、文壇登場作「黒い布」から『生家へ』に至る「習作」として『怪しい来客簿』を位置づけようとする作品史が提示されている。

とはいえ、『怪しい来客簿』の「後記」を参照すると、むしろ明示されなかった作品への関心が向けられるような記述だといえる。たとえば、「はじめて小説らしきものを記したのは中学生の時だから、考えてみると、三十年の余、小説を書き記そうと思っていたことになるが、中学生のときから数えて短いものを五つ六つ、或いは七つ八つ書き記したかどうか。」(「後記」とあるが、これについては『色川武大 阿佐田哲也全集I』の「初期作品」の作品数と矛盾しない。しかし、「阿佐田哲也」の創作活動を知っていれば、次の部分には違和感が生じざるを得ない。

それがどういいうわけか、矢崎泰久さんの『話の特集』から話があつて、十年ぶりに本名を使う気になった。毎月、雑事のあいまに小品をあたふたと記した。一年余で、三十余年のトータルよりも多い量が記せるところが我ながら信用できない。

先述の通り、このとき既に「阿佐田哲也」の正体は明かされているが、「色川武大」側にとって自明とはいえなかった。ところが、『話の特集』一九七五年一月号の「編集後記」（矢崎泰久）において、

好評連載中の『怪しい来客簿』の筆者色川武大はすでにお気づきの方もいるでしょうが、『週刊ポスト』をはじめ麻雀の観戦記や小説、エッセイで知られる阿佐田哲也です。そろそろバラしてもよいとお許しをいただいたのでお知らせしておきます。色川武大が本名です。

と、「怪しい来客簿」連載中に「色川武大」と「阿佐田哲也」の関係が明かされている。これ以降、読者の作品受容が変化していることは、あらためて強調されてよいだろう。読者欄を参照すると、連載当初、「色川武大氏の『怪しい来客簿』期待できそうですね。私が無知なのかもしれないけど、色川さんでどんなものを書いてらっしゃる方ですか？」（相原明子「読者から」『話の特集』一九七五年二月号）と、色川についての知識のない読者が、続編を期待する評が確認できる。そして、渡辺謙蔵（53歳）「読者から」（『話の特集』一九七六年一月号）は、「阿佐田哲也」に関する情報公開後の読者評であり、

□十二月号、色川武大氏の〈怪しい来客簿〉（いい題名）の書き出しに《二村定一》とあるではないか。生れ故郷が私と同じ長州というだけで、他は何かかわりもないけれど、私は彼の歌に、こよない郷愁をいだいて、ことあるごとに友人に

語って来ていただけに、吾が意を得たりと一気にむさぼり読んだ。読後、たいへん有難い気持になった。ギャンブラー阿佐田哲也の眼も、決して乾いているばかりでなく、端倪できないと思ったことでした。健筆を祈ります。

と、両者を同一視しつつ「阿佐田哲也」の認識を改めている。さらに、原田典明（学生・二三歳）「読者から」（『話の特集』一九七六年一〇月号）のように、

□色川武大氏の『怪しい来客簿』が大好きです。特に、氏が勝負師を書く時のタッチが好きです。勝負には、やはり勝者と敗者があるんですね。小生も色川氏ほど麻雀が強くなりたい。敗者は淋しくも悲しい者なのです。

と、内容はもとより、「阿佐田哲也」の背景知識を前提とした投稿がみられる。

これらの同時代評は、「怪しい来客簿」が連載中から高く評価されていたことを示すだけでなく、「阿佐田哲也」という人物の正体を「色川武大」のテキストに見出していくという、別の読みの回路が示されている。

直木賞の選考において「怪しい来客簿」が「小説」として評価されなかった理由の一つとして、「随筆」の傾向が強いことがあげられ、今日、「怪しい来客簿」は「私小説」とみなされている。私小説であれば随筆であれ、その内容が事実だと保証されるわけではないことは周知の通りだが、「怪しい来客簿」は覆面作家「阿佐田哲也」の

麻雀（ギャンブル）小説以外を照らすものとして、その内容が事実として読まれやすい性質が付加されていたのである。

『麻雀放浪記 青春編』や『雀豪列伝 牌の魔術師』を端緒とする一連の「阿佐田哲也」の麻雀小説は、「怪しい来客簿」連載中に『阿佐田哲也麻雀小説自選集』にまとめられているほど、質量ともに充実している。「色川武大」側はそれらを捨象しているようだが、「十年ぶりに本名を使う気になった」（「後記」）とある以上、「阿佐田哲也」の創作活動が周知のものとして扱われている。「後記」を一読すれば、「怪しい来客簿」まで寡作だったこと、今後も寡作であることを予想し、にもかかわらず創作活動を続けていく決心が読みとれる。

しかし、その背景に「阿佐田哲也」作品の蓄積が暗示されているのであり、それは「三十余年のトータルよりも多い量が記せる」のを「これはアマチュアの作法ではない」と自覚している記述にも確認できるのである。職業作家として充実した経歴を隠さず、一方で寡作であることを印象づけようとした両義的な「後記」の意義を、次節より検証していきたい。

### 三 「他に記したものをめぐって

「怪しい来客簿」の単行本化で重要なものとして、作品配列の再構成があげられる。本稿では紙数の関係上、本文の異同を含めた改

稿過程の全貌を明らかにすることはできないが、掲載順の変更に伴う疑問を解決することで議論を展開したい。以下、確認として掲載順の変更を算用数字①～⑮で示し、初出誌の巻号数は年月で掲げ、各短編の題名を付した。

- ・ ① ↓ ① 一九七五年一月号「空襲のあと」
- ・ ② ↓ ② 一九七五年二月号「尻の穴から槍が」
- ・ ③ ↓ ④ 一九七五年三月号「したいことはできなくて」
- ・ 一九七五年四月号（休載）
- ・ ④ ↓ ⑬ 一九七五年五月号「幽霊がスタスタスタ」 ↓ 「墓」
- ・ ⑤ ↓ ⑥ 一九七五年六月号「門の前の青春」
- ・ 一九七五年七月号（休載）
- ・ ⑥ ↓ ③ 一九七五年八月号「サバ折り文ちゃん」
- ・ ⑦ ↓ 削 一九七五年九月号「吾輩は猫でない」
- ・ ⑧ ↓ ⑦ 一九七五年一〇月号「名なしのごんべえ」<sup>⑬</sup>
- ・ ⑨ ↓ ⑫ 一九七五年十一月号「見えない来客」
- ・ ⑩ ↓ ⑧ 一九七五年十二月号「砂漠に陽は落ちて」
- ・ ⑪ ↓ ⑩ 一九七六年一月号「ふうふう、ふうふう」
- ・ ⑫ ↓ ⑨ 一九七六年二月号「とんがれ とんがり とんがる」
- ・ ⑬ ↓ ⑪ 一九七六年三月号「タップダンス」
- ・ 一九七六年四月号（休載）
- ・ ⑭ ↓ ⑤ 一九七六年五月号「右むけ右」
- ・ ⑮ ↓ ⑭ 一九七六年六月号「月は東に日は西に」



- ・ ⑬→⑭ 一九七六年七月号「たすけておくれ」
- ・ ⑮→⑯ 一九七六年八月号「スリー、フォー、ファイブ、テン」
- ・ ⑰→⑱ 一九七六年九月号「また、電話する」

・ 一九七六年一〇月号（休載）  
 ・ 一九七六年十一月号（休載）

矢崎泰久「編集後記」（『話の特集』一九七六年十一月）によれば、最後の二回の休載時点で既に単行本化が決まっていたようであり、さらには「来春早々、本社から『怪しい来客簿』を上梓する予定です。本誌に連載したものに手を入れ、更に書き下しを加えたいと病床にありながら意欲十分です。」（矢崎泰久「編集後記」『話の特集』一九七六年十二月）と、増補の可能性が言及されているが、実際には「吾輩は猫でない」が単行本未収録、「幽霊がスタスタスタ」が「墓」に改題、改稿されたうえでの一七編として刊行された。

全編にわたって配列が変更されていることもあり、その編集意図は定かでないが、「空襲のあと」(①)と「尻の穴から槍が」(②)は、全ての書誌で掲載順が同じである。そして、「空襲のあと」(①)には「無期停学」が、「尻の穴から槍が」(②)には「私は中学を、卒業でなく落第でなく、なんとも中途半端な形にほうりだしており、未来はその半端な形の上に積み重なっていくはずであった。」という一文の直後の段落に、「無頼」という表現が用いられていることに注意したい。つまり、連作の第一回と第二回は、「怪しい来客簿」における語り手「私」の自己紹介に相当し、作品全体に「私小説の

読みのモード」を生じさせる効果を持っている。

年譜によれば、色川が創作活動を開始したのは、一九五五年頃だとされている。「右むけ右」や「門の前の青春」に記された、中学時代や戦後すぐに出版したとされる「小冊子」、つまり色川の伝記的事項において「無期停学」にまつわるガリ版同人誌は、年譜にも記されなかった前史的な位置にあるのだが、今日まで公に伝わっておらず、内容についても確認されていない。しかし、短編小説「百」（『新潮』第七八巻第四号、一九八一年四月）に「題名は失念したが、父親を新割りで叩き殺す話だった。」とあり、『うらおもて人生録』（毎日新聞社、一九八四年十一月）の「俺の中学時代——の章」でも語られている事柄であるため、色川にとつて関心の強いモチーフだったことは確かである。しかし、注目したいのは、色川の実際の学歴や、実証を伴わない「私小説」論ではなく、「無期停学」が後天的に描かれるようになったモチーフだということである。

たとえば、「黒い布」の好吉は高等学校に進学しており、掲載誌『中央公論』での色川の「略歴」（『受賞の言葉』）は、「昭和二十年、旧制中学校を卒業。」とある。また、『麻雀放浪記 青春編』では中学の学年を聞かれた「私」が「もう卒業してる。坊やはやめてくれ」（『チンチロ部落』）と答える場面がある<sup>15</sup>。つまり、初期において色川とその反映とみられる登場人物たちは、中学校を卒業しており、色川が生涯にわたって反復して描いた「無期停学」というモチーフは、最初から描くべきものと認識されていたわけではなく、創作活

動を続けていくうちに「無頼」の人物像を支える根拠として再発見された、と解釈するのが妥当だと考えられる。

次の引用は「門の前の青春」の一節である。初出誌から初刊本にかけて、「才」が「歳」に改められ、「三つのもの」の助詞「の」が脱落しているのは、本文に異同はない。

一方、私たちは二人の小遣いを合わせて謄写版の機械を買いこみ、ガリ版雑誌の作製に熱中した。その件については他に記したものが多くは触れないが、要約していえば（もちろん十四歳の少年が作るレベルでいつて）文学・生活・生理、この三つ（マ）ものが雑多に入り混じった、いかにも私たちらしい雑誌だった。大滝が「意味」から「存在」に関心を示したように、私も「存在」だけの不安を「意味」でおきなおうとしていた。私たちは等しくはなかったが、結果的に一身（マ）同体といってもいいほど接近しあっていた。

この部分では作者と同一視される「私」が、中学時代にどのような文章を書いていたかを語り、「無期停学」になった経緯を伝える挿話だが、「その件については他に記したものはある」という点に疑問が生じる。初刊本以降の「怪しい来客簿」に限定すれば、「他に記したものは直前の「右むけ右」のことが想定される。同人誌が教師に露見した原因である「某という生徒」に私刑を行う場面があるからである。しかし、初出において「毎月、雑事のあいまに小品をあたふたと記した」（後記）という事情を無視しても、「門の

前の青春」より後に発表された「右むけ右」と「他に記したものを一致させることは不自然である。さらに、「右むけ右」の初出形には私刑の場面がなく、「私はガリ版の同人雑誌をやっついて無期停学になった」と語られるのみで、記述を省略するほどの分量は割かれていない。「他に記したものは」とは「怪しい来客簿」以前の発表作を指しているのである。そこで、今日に想起されるのは「初期作品」の一つに数えられる短編小説「穴」であるが、本名名義作品に求めようとする視点こそ、色川が用意した作品史に基づくものだけといわなければならない。

「怪しい来客簿」というテキストは「阿佐田哲也」を背景としながら「無期停学」のモチーフを反復させることで「無頼」の人物像を補強し、「色川武大」の過去のテキストを読ませようとする。なぜなら、「無頼」を過ごした作家の誕生は「ガリ版同人雑誌」による「無期停学」という文学的体験にこそ由来を見出せるからである。たとえば、「空襲のあと」の「私」は「江戸川乱歩さんの怪談」を紹介し、「門の前の青春」では大滝幹良という「最初の文学的友人」と戦後に「二三度、小冊子を出したと思う」という記憶とともに、そのテーマが「自分の生涯に根ざした小説」だと回想する。また、編集者としての過去を語り様々な文学的体験を明らかにしていく「私」からは、麻雀賭博（ギャンブル）ではなく「書くこと」によって生きてきた人物像がうかがえる。

結論の一つとして、「本名を使う仕事」としての「怪しい来客簿」

には、多くの変名作品の間に埋没してしまった「色川武大」の作品を読まれることの期待が込められているといえるだろう。そのことが「私小説の読みのモード」を強化させているのだと考えられる。寡作の「色川武大」を演出する意義とは、麻雀小説作家として著名となり「無頼」を標榜する「私」の半生が、新人賞を大きな契機とする「文学」によって形成されてきたことの表明なのである。

これまで「怪しい来客簿」に本名「色川武大」名義が用いられ、「無頼」の人物像が標榜されることの効果を明らかにしてきたが、それは「阿佐田哲也」の活躍があつて可能になる手法だった。だが、過去作品の参照を示唆していたとして、「怪しい来客簿」にとつて変名作品は、どのような意味があるのだろうか。色川が「阿佐田哲也」以前に変名で娯楽小説を書いていたことは『井上志摩夫傑作時代小説集』で確認できるが、「怪しい来客簿」というテキストが読みかえられるのを想定していたかどうかは定かではない。「阿佐田哲也」以前の小説テキストを対象とすることで、その点について考察していきたい。

#### 四 「私小説」における事実

本名「色川武大」名義で発表された単行本未収録作品の一つ「夜の風の纏れ」は、現時点で色川の最も古い活字テキストに位置づけられる短編小説である。語り手「ぼく」とKという登場人物の会話が

中心で、「穴」と「門の前の青春」との関連、「うらおもて人生録」で語られる色川の実生活との類推が指摘できる内容で、その梗概は次のようになる。

Kは毎日「ぼく」の家に来て「ぼく」との「無意味なゲーム」をくりかえしている。その日は「ぼく」からの提案で「Dと云う作家の小説」を参考にした「お話の作りっこ」に決まる。「コメデイ」をテーマに「ぼく」から話をはじめますが、内容は「山手の中流家庭」の「茶の間」を舞台とする母子家庭の生活で、家の金を盗む息子の心理が語られていく。「ぼく」は「お話」を進めるが、「Kもぼくも親のすねかじる身であつた。あまりに身近かだつた」ため笑えない。Kがその話を引き継ぐが、「ぼく」が制止したことによって「ぼく」の「お話」が「大体事実談」だったことが明かされる。Kは母親に甘える息子について語った後、「家へ帰つておふくろと二人つきりになる。明日からここへは、絶対に来ない」と宣言し、「ぼく」の家を出ていく、というものである。

掲載誌『運河』について平野謙「同人雑誌評」(『文學界』第五巻第一二号、一九五五年一二月)がとりあげており、「夜の風の纏れ」については、「太宰治風の軽い話術だけで読ませる作品だが、とても太宰治風の才気は無いため凡作に終つている。」と評している。平野は「凡作」としたが、その作風について、太宰治の名前が挙げられている事実は注目しなければならない。当時無名の色川に対する同時代評に「私小説の読みのモード」を見出せないことは当然の

ことだとしても、太宰治との比較が珍しくない色川の評価史において、それを指摘した最初期の例だからである。<sup>16)</sup>

「最後の無頼派」と称されるようになった色川が、一九五五年に「無頼派」作家をとりいれた小説の表現を模索していた形跡は、平野謙の同時代評を例外に、これまで言及されていなかった。「Dと云う作家の小説」とは太宰治「人間失格」(『展望』全三回、第三〇号、一九四八年六月、第三二号、八月)が推定され、「お話の作りつこ」とは「喜劇名詞、悲劇名詞の当てつこ」を模したものである。引用部分の直後に「庭の葉蘭」という表現もあるので、「人間失格」の主人公、大庭葉蔵の連想が可能である。色川はまず、実生活ではなく、文学史から「無頼派」的な表現を目指していたことが確認できるのである。色川のテキストに類出する「無期停学」やガリ版同人誌について語られておらず、「私小説」として読むには、あまりに情報が不足しているためでもある。

発表当時、「夜風の纏れ」を「私小説」として読んだのは、一部の関係者に限られるだろうが、今日的には作者名によらずとも色川の書いたテキストであることが容易に推定できる。たとえば「お話」の中に「麻雀バクチ」とあることも根拠の一つにあげられるが、次の引用部分に「穴」と「門の前の青春」と類似している表現があるからである。

戦争中に父親を爆死させたKの家庭は、戦後慣れない商売を始めた母親の腕にすがっていた。Kは学院でも往復の道でも学

帽をかぶらず、ポケットにぐしやぐしに突込んで、講義が終るとそ、くさと大学に近いほくの家に来て、夜更け迄じつとしていた。時には泊つて行く事もあつたが、そんな時でもKは窓外をのぞこうともしなかつた。外界を憎悪しているようでもあつた。

比較してみると、同じKというイニシャルの「夜風の纏れ」と「穴」、そして「門の前の青春」の大滝幹良は同一人物がモデルになっていると考えられる。「穴」における類似表現として、

寄宿寮を出されて自宅謹慎に入った。ある日Kがぼくの家を訪ねてきた。Kは反抗の姿勢のつもりか高下駄をはき、学帽をポケットにねじこんでいた。二人で近所の上野の山に行った。道々、警報が鳴った。

という部分があり、Kの行動に「反抗の姿勢」という意味が加えられている。「門の前の青春」の大滝幹良は早稲田大学露文科に進学したとされ、「私の家は早稲田のそばだった」(『門の前の青春』)ことから大滝は「私」の家に来るのだが、「学生服は着ていたが、無期停学のままの中学生である私に配慮したのだろう、大学の帽子はポケットに突込んでいた。」という記述があり、Kと同様の行動が「配慮」であると語られる。これは「うらおもて人生録」(『黒星の算えかた——の章』)においても同一のモデルと思われる人物「O」の挿話として「俺のところ遊びに来るときは学帽をはずしてポケットの中に隠してくるんだ。配慮してくれてたんだね。」となつ

ている。

最初期小説「夜風の纏れ」から「穴」、さらには「門の前の青春」へと意味づけられながら反復される友人の「学帽」の描写は「うらおもて人生録」で反復されることによって、事実化される。これらの真偽を確かめる術は、大滝幹良という名の「小説」の登場人物の証言を待つしかない。問題は、それが事実かどうかより、過去に遡れるテキストを発表し続け、事実そのままのように読めてしまう「小説」を書いた過程なのである。これらを踏まえ「門の前の青春」において「他に記したもの」と想定される「穴」をとりあげると、「無期停学」になった原因が「ガリ版同人誌」の「編集発行人」だったことに加え、学校（体制）の不正を暴こうとした内容を書いていたという記述が、あらためて注目されるだろう。「右むけ右」は初刊本で、「工場の寮に合宿していたとき、つきそっていた四人の教師たちが酒を呑み、酔っ払っているというニュースが伝わった。」という要素が追加されており、改稿に際し、反体制を強調しているのが読みとれる。

これまでの議論をまとめておきたい。「怪しい来客簿」に限らず、色川の小説の多くが「私小説」としてみなされる傾向にあったが、書かれている内容が色川の実生活に基づいている根拠はなく、蓄積された色川のテキストそのものが根拠として用いられてきた。本稿もまたそのようにして、色川の複数のテキストを参照しながら類似表現を検討していったとき、最初期小説にまで遡れることを確認し

た。しかし、そこに色川の伝記的事項として知られる「無期停学」や「ゼツペキ」のモチーフはなく、それらが後天的に獲得されたものであることも確認できた。「怪しい来客簿」の成立過程を探っていくと、「門の前の青春」へ至るまでにK（大滝幹良）の同一の行動に、新たな意味が生じているのだが、最終的には「無期停学」の自分への「配慮」だと結論づけられている。

色川の創作活動は、ガリ版同人誌の発行と、それによる「無期停学」が出发点といえるのだが、その原因は、反体制的な記事を書いていたことが短編小説「穴」で語られている。「無期停学」の体験を反復させながら小説を書くことは、反体制的な立場をとるということを、その事実関係が「小説」というジャンルにほかされつつ、「怪しい来客簿」における「無頼」の人物像と合わせて打ちだされているのだと考えられる。だとすれば、色川の「私小説」は、どのような文脈において要請されたのだろうか。

## 五 「最後の無頼派」の源流

出久根達郎は「エッセイ風小説」において、「小説を実録物と勘違いする」ことがあると前置きしたうえで、色川の小説を次のように評している。

これは多分に、色川文学の構造のせいでもある。短編のほとんどが、「私」の昔話から始まる。あるいは、身辺雑記から入る。

エッセイのように、何気なく語りだし、いつのまにか、小説の世界に移行している。どこからが創作の部分なのか、境界がはっきりしない。最後までエッセイのつもりで読む時が、往々、ある。

色川武大の「生いたち伝説」に惑わされているせいもある。このような読み方は、既に検討した直木賞選評にも通じるものである。「生いたち伝説」とは、これまで確認してきた「無期停学」などのモチーフが想定される。「けれども、読み終って、ああ面白かった、あるいは、よかったなあ、と満足したなら、それがエッセイだろうと小説だろうと、別に構わないのである」といった感想を加えながら「実は色川氏もそう考えて書いていたのではないか。」と推測し、「これを要するに色川氏が作ったお話より、私は色川武大その人が読みたいのであろう。」とまとめている。「随筆」(エッセイ)や「小説」などジャンルにこだわらず内容を読み、作者の人格を楽しむことを、色川テキストの読書行為の魅力として述べている。

しかし、「杉民也」名義の短編小説「寝心地よいアスファルト——小説・ドヤ街の子供たち——」(『小説倶楽部』臨時増刊、第一巻第一二号、一九五九年一〇月)に、そのような読み方は適用できない。「杉民也」は色川の変名の一つで、目次では「ルボ小説」という角書きがある。本文の末尾に「(この物語は現実の幾つかの要素を再構成したものですので、登場人物はこのまゝの形で実在してい

ない事をおことわりします)」という断り書きがあるように、取材によって書かれたことがうかがえる。この小説は、物語の導入として語り手が深川高橋のドヤ街の概要を説明している。本編では小学校教員の大場保が老教師から児童の作文を見せられたことを契機に、ドヤ街に住む児童に関心を持つ。その学校の児童の水島和子と前島菊夫が、それぞれの家庭の経済状況に悩みながら交流していく。大場は何かと声をかけるが、それに頼ることはしない。

この物語を通じてドヤ街で暮らす人々を描こうとしたものと考えられるが、小田三月によれば、色川と小田は高橋への取材を試みていたようである。<sup>(19)</sup>その経験に基づいていると推察されるが、作者、語り手、大場保のいずれからも「色川武大」との同一視はできず、私小説化による面白さは期待できない。この小説と比較したとき、「怪しい来客簿」の「とんがれ とんがり とんがる」は、色川の伝記的事項を構成する「私小説」としての極めて重要な位置を占めている。

「とんがれ とんがり とんがる」は、二行空きによって五つのまとまりから構成されており、語り手が「昭和三十年頃」、「売文」の一環として、東京下町の小学校の特殊学級で取材していた経験を述べる。「ゼツペキ」と渾名される「私」の「いびつな頭部」の「奇形の心境」が語られ、話の中心は「深川高橋のドヤ街で一人の少女と知りあった」という体験に移行し、美千代という「一人の少女」との交流、その顛末が後日談的に記されることで物語が結ばれる。

ここで「私」は「十代後半から二十代にかけて、私はよくドヤ街に泊っていた」と語るため、「無頼」の人物像や「阿佐田哲也」の背景知識を考慮すれば、作者の実体験として読むことも無理ではない。むしろ、このような短編があるため、「随筆」と「小説」との区分において評価されにくくなるのだろう。

安岡章太郎と三浦雅士の「特別対談」において、安岡は母親（色川あき）による色川の人物像を紹介している。現時点では、その出典を特定できず、初出未詳とせざるを得ないが、ここに引用しておきたい。

安岡 色川くんが逝った直後の週刊誌で、色川くんのおふくろさんが心をこめてコメントしている。ここに持ってきたんだけれど、

「無頼の生活といわれる点についても、私にはよく判りません。確かに、物書きを始めてからは、家を出て何日も帰らないこともよくありました。そういうのは確かに無頼は無頼でございましょうけれど、私には、それらは全部、仕事のために人に会っているからだとしておりました。夜、汚い格好をして出かけるときも、浮浪者の研究のために、自分もボロを着ないと仲間に入れてもらえないから、とのことでした。つまり、取材なんですよ。破滅的とか、無頼とかいいまでもね、本人はお酒さえあまり好きじゃないし、親の目から見れば、あの子は決して不良ではありませんでしたよ」

と言っていたんです。僕はこれを読みながら、親の恩というものを感じたな。

その後で安岡は「もちろん母親は平気で嘘をつくものですが」と述べているため、この証言が事実だとは断言できない。しかし、変名「杉民也」名義での発表作「寝心地よいアスファルト」がドヤ街のルポルタージュの試みであるのに対し、「とんがれ とんがり」とんがる」では、語り手の「私」がドヤ街の住人として、人間関係を自然に成立させ、物語に臨場感を生じさせている。まとめれば、「怪しい来客簿」の「一貫性」とは「色川武大」が書いていることであり、「取材」を「小説」に昇華させることが、色川が「無頼」を標榜する必然性なのである。

過去に書いた小説テクストを「怪しい来客簿」という連作小説に仕立て直したことで、「一貫性がない」や「玉石混淆の感」といった否定的な評価に結びついた可能性は疑いようがない。しかし、「寝心地よいアスファルト」のように物語の外部で語り手が問題提起したり、架空の登場人物に代弁させたりしかできなかったドヤ街の実態を、「無頼」の標榜によって、「私」の肉声のように対象に接近した小説として復活させた利点は大きい。このことは、一つの作品としての完成度の是非より重要な要素である。「私小説」という用語で説明されてきた色川武大とその作品群だが、『怪しい来客簿』の成立過程に注目することで、作品の内容そのものの議論を促すために作者が「私」を積極的に活用したことが明確になったからである。

本稿では、『怪しい来客簿』の成立過程の考察を通じて、色川武大の初期の解明を試みてきた。「第三の新人」や「内向の世代」といった、同時代の文芸思潮に位置づけられなかった色川ではあるが、麻雀小説作家「阿佐田哲也」の活躍を内在させた「怪しい来客簿」において、「無頼」を標榜する作家「色川武大」の創作活動を開始したとき、「最後の無頼派」と称されるような資質の開花がみられるのである。それは、「怪しい来客簿」の独自の表現だけで成立するものではなく、「無頼派」の表現を継承しようとする最初期小説「夜風の縫れ」まで遡れるだろうし、その後の過程にある娯楽小説作家としての変名作品の蓄積も、その源流としてあげられるだろう。しかし、「無頼派」という用語そのものが曖昧である以上、色川武大の文学史的立場が「最後の無頼派」という用語で説明しきれるわけではなく、今後、さらに考察を深めていかなければならない。「夜風の縫れ」と「寝心地よいアスファルト」は、それ自体が既成の年譜の修正を図る有意な小説であるものの、外的要素に紙数を割いたため、概要を示すにとどまった。「怪しい来客簿」を含む個別のテキストの内実については、あらためて論じることとしたい。

注

- (1) 二〇一〇年代の刊行物としては、『小さな部屋・明日泣く』（講談社、二〇一一年一月）『友は野末に——九つの短篇』（新潮社、二〇一五年三月）『三博四食五眠』（幻戯書房、二〇一七年八月）『戦争育ちの放埒病』（幻戯書房、二〇一七年一〇月）があげられる。

(2) 色川武大編「色川武大年譜」には「変名」と「本名」に関する記述が目立つ。たとえば、「一方、生活費稼ぎに、娯楽雑誌編集者の友人たちを頼り、変名で娯楽小説を書く。（中略）この間の変名作品百本余はあるが、保存をしないのですべて散逸。」（——昭和三十年（一九五五）二十六歳）をはじめ、「変名で売文するのが空しくなり、不意に廃業。（中略）変名は自粛して使わず。」（——昭和三十六年（一九六一）三十二歳）

「禁を破り、変名で原稿料の高い週刊誌に麻雀小説を書く。変名、阿佐田哲也。」（——昭和四十三年（一九六八）三十九歳）といったように、「怪しい来客簿」へと至るまでには「変名」の使用に対する葛藤がうかがえる。

(3) 「序論 日本近代を語る私小説言説」（語られた自己——日本近代の私小説言説）大内和子・雲和子訳、岩波書店、二〇〇〇年一月、一〇—一頁。

(4) 北上次郎「余計者の系譜」（太田出版、一九九三年四月）は、「私小説」として言及されることの多い色川作品から「阿佐田哲也」名義のキャンブル小説をとりあげ、「余計者の文学」の一つに位置づけたいうえで「ピカレスク」の視点で評価している。

(5) 「文学における無頼とは何か——無頼派を中心に——」（『国文学——解 釈と教材の研究——』臨時増刊号、一九七〇年一月）。

(6) 掲載順に列挙する。

- ・「黄色い封筒」（『薔薇』創刊号、一九五七年四月）
- ・「黒い布」（『中央公論』八八八号、一九六一年一月）
- ・「水」（『小説中央公論』第六号、一九六二年一月）
- ・「眠るなよスリー・ピイ」（『小説中央公論』第一五号、一九六三年六月）
- ・「穴」（『層』創刊号、一九六五年一月）
- ・「蒼」（『風景』第六卷第八号、一九六五年八月）
- ・「ひとり博打」（第七次『早稲田文学』第二卷第五号、一九七〇年五月）
- (7) 「第77回直木三十五賞決定発表」（『オール讀物』第三三卷第一〇号、一九七七年一〇月）。



(8) 「阿佐田哲也氏の雀豪的人生観 牌をつかんで死に、ペンを持って生き返った覆面作家」〔週刊大衆〕一九六九年一月二日号)のように、吉行淳之介との対談まで「阿佐田哲也」名義は「覆面作家」の筆名として流通していた。

(9) 初出「野性時代」全四回、第六卷第七号、一九七九年七月〜第六卷第一〇号、七九年一〇月。

(10) 「色川武大の「空白」期間」〔古くさいぞ私は〕晶文社、二〇〇〇年二月)。初出(『図書新聞』第三七四号、一九九八年一月二四日)に「井上志摩夫時代小説集、刊行によせる」という副題がある。坪内が参照した年譜は、実際には「別冊・話の特集 色川武大・阿佐田哲也の特集」(第二八三号、一九八九年七月)所収のものとされる。

(11) 「解説」『小さな部屋』の重要性」〔文學界』第五三卷第五号、一九九九年五月)。

(12) 村松友視・伊集院静「対談「色さん」と「阿佐田さん」の間に」〔KAWADE夢ムック 文藝別冊 「総特集」色川武大vs阿佐田哲也』河出書房新社、二〇〇三年一〇月)では、「生家へ」を重要視する次のような会話がある。

村松 これがないと成り立たない場が、その先にいっぱいあるものね。  
伊集院 そうですね。この作品が軸みたいなのころがあつて、「黒い布」も「生家へ」のためにあつたところがある。(後略)

(13) 初刊本以降、「名なしのこんべい」に改題されている。

(14) 初出「毎日新聞」全五五回、一九八三年八月七日〜八四年八月二六日。

(15) 初出「週刊大衆」全三二六回、一九六九年一月九日号〜七月三日号。

(16) 土屋忍「神さま嫌い——色川武大『狂人日記』論」〔叙説Ⅲ』第七号、二〇一一年九月、一四五〜一六〇頁)参照。

(17) 「文學界」第五一卷第五号、一九九七年五月。

(18) 「現代人劇場 麻雀の鬼・阿佐田哲也のもう一つの顔」〔週刊サンケイ』一四四九号、一九七七年二月一七日)で、「杉民也」が色川の筆名の一

つとして紹介されている。

(19) 「同人雑誌のころ」色川武大 阿佐田哲也全集』第六卷付録、月報14。

(20) 「文學界」第五一卷第五号、一九九七年五月。

付記

※本文の引用は、特に断りのない限り、初刊本によつた。

※本稿は、二〇一六年七月一八日に立正大学で開催された近代文学合同研究会若手研究者集会での口頭発表(発表題目「色川武大『怪しい来客簿』の成立過程をめぐって——「私小説」と「私ノンフィクション」の接点——)の一部に基づいている。当日の会場をはじめ、貴重なご意見をくださった方々にお礼申し上げます。